

新興感染症に備えた実動訓練を実施

～可茂保健所・地域医療機関と連携～

当院は岐阜県と医療措置協定を締結し、第一種・第二種の指定医療機関に指定されています。

このたび 2025年7月17日、岐阜県可茂保健所による「新型インフルエンザ等対策に係る実動訓練」が、当院を会場として実施されました。

今回の訓練は、新型インフルエンザをはじめとする新興感染症発生時に、医療機関と保健所が円滑に連携し対応できる体制を確認することを目的に行われたものです。発熱外来での受診から、保健所による患者移送に至るまで、一連の流れを実際の動きに即して検証しました。

当日は、可茂保健所をはじめ、中部国際医療センター、太田病院、藤掛病院、東可児病院、桃井病院の皆さまにもご参加いただき、本番さながらの緊張感の中で訓練を実施することができました。今後も地域の関係機関と連携しながら、有事に備えた体制づくりを進めてまいります。



院内BLS研修

2025年7月30日、31日に院内BLS研修を行いました。各部署からコアメンバーを選出し、実技訓練を実施しました。終了後はコアメンバーが中心となって、所属部署で指導を行います。この研修は医師や看護師だけでなく、事務職など全ての職種を対象に、研修を実施しています。

病院内において、患者さんが突然心肺停止や呼吸停止となった場合に全ての職員が一次救命措置(心肺蘇生法)を知っておくことはとても重要です。BLSは誰でも実施できる蘇生法であり、適切な実施により救命率をあげることでできるスキルでもあります。継続的な研修を行うことにより院内全体のスキルアップへつなげることを目標としています。

BLSとは心肺停止または呼吸停止に対する一次救命処置のことです。専門的な機材や薬品など使う必要のないBLSは正しい知識と適切な処置の仕方さえ知っていれば誰にでも行うことができます。引用:NPO法人日本ACLS協会ガイド



編集あとかき

今回は、院内で行っている研修や勉強会などの取り組みについてご紹介しました。職員が少しずつ学びを重ね、患者さまにより安心していただける医療につながればと考えています。これからも、身近な話題をお届けしていきたいと思ひます。

JCHO 可児とうのう病院の「いま」を伝える

はとぶき

hatobuki | vol.39 | 2025 AUTUMN

独立行政法人 地域医療機能推進機構
可児とうのう病院

Kani Tono Hospital

「安心の地域医療を支える」可児とうのう病院
～予防・医療・介護の切れ目ない提供～

可児地域病診連携カンファレンス 開催のご報告

可児とうのう病院 副院長 / 外科 井上 総一郎



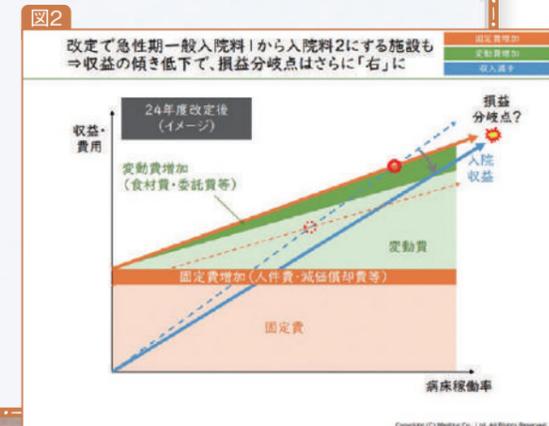
2025年6月26日に可児医師会と第一三共株式会社の共催でハイブリッド形式(現地は可児市文化創造センターala+Web配信)の可児市地域病診連携カンファレンスを行いました。多数のご参加ありがとうございました。

まず当院副院長/麻酔科の洪淳憲先生に「可茂消防署管内救急搬送受け入れ可否件数の分析」と東可児病院院長/脳外科の櫻井剛先生に「可児市における脳外科領域の病診連携」という一般演題をいただきました。

続いて株式会社メディチュア代表取締役の渡辺優先生に「可児エリアの今後の医療提供体制と連携強化について ～データから地域の特徴を踏まえた取り組みを考える～」という特別講演をいただきました。以下、要点をピックアップさせていただきます。

厳しい病院経営環境の話から始まりました(図1)。損益分岐点の病床稼働率は100%超えです(図2)。その中で、高齢者救急がターゲットの**地域包括医療病棟**(以下地医療)に着目されました。看護必要度の厳しい高齢者救急患者の地医療域入院料が悪くないのです。治す医療(急性期)と支える医療(地ケア)に、新たな支える医療(地医療)を加えることが、2040年に向けた機能転換とのことでした。届出条件は厳しく、岐阜県内はまだ1施設ありません。それでもADLで病棟を分ける、つまり急性期、地ケアと地医療の3つを今から考えた方が良いとの助言でした。大半の急性期病院は高齢者救急主体となり、受け皿が地ケアや地医療になります。すでに地医療を設置しDPCを止めた施設も示されました。

最後になりますが、今後も同カンファレンスの継続と内容の発信を考えていきます。連携を含めて皆様のご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



院内感染対策研修会

今さら聞けない！けど聞きたい！
院内感染対策

6月18日、今年度第1回院内感染対策研修会として公立陶生病院感染症内科主任部長の武藤義和先生に「今さら聞けない！けど聞きたい！院内感染対策」と題しご講演を賜りました。武藤先生は新型コロナパンデミック下、エキスパートとしてテレビにも多数出演された御高名な先生ですが、大変気さくな方で、わかりやすい、またユーモアあふれるご講演はあっという間で、院内感染の起こり方、広がり方やその防止の方法など幅広く教えていただきました。

本来病院では新たな感染を拾ってはいけない場所であって、新型コロナウイルスや耐性菌をもつ患者は可能な限り早期に発見してそれ以上の広がり止めなければならないこと、またそのためにも普段からの医療従事者全員の手指衛生が最も大切であることを改めて勉強させていただきました。

当日は当院職員158名と13の高齢者施設から30名の参加でしたが、活発な質疑応答があり、院内感染対策に対する関心の高さがうかがえました。このような勉強会をふまえ、当院では今後とも職員一丸となり一層の感染対策に努力してまいります。

副院長 伊藤貴彦

今さら聞けない！けど聞きたい！
院内感染対策



手指衛生の5つのタイミング



公立陶生病院
感染症内科 主任部長
武藤 義和 先生



PROFILE

- 2008年 岐阜大学卒業
- 公立陶生病院 研修医
- 2010年 岐阜大学高次救命センター 医員
- 2011年 大垣市民病院 呼吸器内科 医員
- 2014年 国立国際医療研究センター
総合感染症コース チーフレジデント
- 2017年4-9月 Mahidol(マヒドン)大学熱帯医療講座
Diploma of Tropical Medicine & Hygiene
- 2017年11月~ 公立陶生病院 感染症内科 医長
- 2019年4月~ 同科 主任部長就任

一般感染症、結核、HIV、感染対策、輸入感染症に至るまで幅広い感染症分野における診療および院内外への教育活動を行う。著書に「新型コロナウイルスに対する 学校の感染対策」(丸善出版)。

医療安全研修会

患者安全を阻害する
Disruptive Behavior



今回、名古屋大学病院医療安全推進部の長尾能雅教授をお招きし、「患者安全を阻害する Disruptive Behavior (破壊的行動)」をテーマに医療安全研修会を開催しました。

医療は、互いを尊重し、患者さんを中心に多職種が連携してこそ良い医療が提供できます。しかし医療者の中には、無自覚のうちに乱暴な言動や怒りに任せた行動をとり、人間関係や医療ケアに悪影響を及ぼすことがあります。このような、個人的な嫌がらせを含む不適切な行動を「Disruptive Behavior」と呼びます。

研修では、具体的な事例が示され、自分自身も同様の行動をとっていたかもしれないと振り返るきっかけとなりました。また、こうしたDisruptive Behaviorもインシデントレポートとして報告してよいことを知ることができました。

私たちは、医療者が安心して働ける職場環境を整え、患者さんにチームとしてより良い医療の質と安全を提供できるよう努めていきます。今回の研修は、「一人ひとりの行動が医療安全につながる」という大切なことを改めて実感する機会となりました。

Disruptive Behaviorとは？

「破壊的な、規律を乱す行動」(英辞郎)
怒鳴る・侮辱する・馬鹿にしたような態度をとる・
嫌味を言う・物を投げる・暴力をふるう

↓
チーム内での円滑なコミュニケーションや情報共有を
阻み、治療のアウトカムや患者の安全性に負の影響を
もたらすとされ、組織的な対策が求められる

※本人が指導の一環と行って行っている場合と
衝動的な場合があるが、いずれも同様

どの程度、身近で起きているのか
Disruptive Behaviorに遭遇したことがあるか？
[n=185,複数回答可]



名古屋大学医学部附属病院
副院長 /
医療の質・安全管理部 教授
長尾 能雅 先生



PROFILE

- 1994年3月 群馬大学医学部卒業
- 1999年4月 公立陶生病院 呼吸器・アレルギー内科 医員
- 2001年4月 名古屋大学医学部 第二内科学教室 医員
- 2003年7月 名古屋大学医学部附属病院 呼吸器内科 医員
- 2004年4月 土岐市立総合病院 呼吸器内科 医長
- 2005年10月 京都大学医学部附属病院
医療安全管理室 室長・助教
- 2008年3月 同 講師
- 2010年4月 同 准教授
- 2011年4月 名古屋大学大学院医学系研究科
医療の質・患者安全学 教授
- 名古屋大学医学部附属病院
医療の質・安全管理部 教授 兼 病院長補佐
- 2012年11月 名古屋大学医学部附属病院 副院長